



オリジナルテキスタイルブランド「ケイコロール」



いがすり
井縞柄



やがすり
矢縞柄



四つ目菱



型染めだけでなく手描きも手掛ける。生地直接素描きをしていく。



駒への圧力を一定にし、色ムラにならないよう均一に糊をのばしていく。



ドラマや舞台の「ハレ」を演出するモノづくり

顧客ニーズを形にする ワンストップ体制

舞台やテレビ、映画などで使用される衣装を、デザインから染め加工、縫製までオーダーメイドで生産し、貸衣装店等に提供している。「衣装デザインは最初から仕様が決まっているわけではなく、感覚的な注文が多いんです」と代表の山元宏泰さん。ある喜劇舞台で、「分かりやすく、迫力がある衣装を」というオーダーがあった。創業以来85年にわたり蓄積してきた10万枚の型紙の中から、戦国武将が使っていた家紋の一つで、強そうなイメージがある四つ目菱に注目。特徴である菱形の模様をシン



山元染工場

代表者/山元 宏泰
住 所/京都市中京区壬生松原町 9-6
TEL / 075-802-0555
URL / <http://www.yamamoto-some.jp/>
事業内容/テレビ・演劇・舞台・祭衣裳等の染め、縫い、加工制作一式

画面の向こう側の視聴者に 臨場感を伝える技術とノウハウ

顧客に提案することで、完成イメージをつかみやすいように工夫している。次々と新しい作品が作られるテレビや舞台の世界で、スピード感あふれる同社の対応は、長年にわたり顧客の支持を獲得している。

ブルな白と黒色でそれぞれ並べて表現することで、伝統的な柄が斬新なデザインに生まれ変わり、観客席からでも見やすく目立つ衣装に仕上げた。今ではその舞台、その場面の定番衣装となっている。
イメージを伝えれば、望みの衣装がワンストップで届けられる…。こうしたニーズへの対応を可能にするのは、ほとんどの工程を自社工場で行うとともに、外注先との強固なネットワークにより、受注から納品までの工程全体を管理するコーディネーター力が発揮されているからだろう。さらに、数ある型紙をもとに、柄見本や巻見本(約20種類以上の柄や配色をテーマ別に連続して染めたもの)

同社は、創業以来「濡れしぎ」という、今や京都でもめずらしい特殊な染色技法を持っている。絵柄の上に直接糊を置き、地色の糊が濡れているうちに蒸して色を定着させる技法で、地入れや乾燥の工程が不要なため、短納期小ロット対応が可能。また、染料の濃度が高く、鮮やかで艶のある発色が魅力だという。宏泰さんの母親の山元久仁子さんは、この高度な技術を保有している数少ない職人の一人であり、「これまで培ってきた技術を継承していつまでもいたい」と願う。また、染め工程の中で最も時間を要する色合わせでは、色糊作りにおける染料や糊の知識・ノウハウが詰まった「レシピ」と呼ばれる記録帳を初代の頃からつけている。その

数は千色にも及び、このレシピを活用することでスピードアップを実現している。

「短納期の要望に応えつつ、画面の向こうで、どうすれば視聴者に臨場感が伝わるかを意識しています」と話すのは、主にデザインを担当する奥様の桂子さん。例えば、ある連続テレビドラマの仕事では、コスト的にも時間的にも織物で制作することが難しい矢縞柄の衣装を、濡れしぎならでは発色の良さを生かし、矢印の部分に細い線が入ったエッジで表現。染色でありながら、まるで糸を紡いだような風合いに仕上げた。また、テレビでは白い部分はハレーションを起こしてしまうため、わずかに色をかける(「目消し」)等、自社が磨きかけた技術、ノウハウを活用することによってリピート受注につながっている。

新ブランドを立ち上げ 強みの活用で新市場を開拓

平成25年、宏泰さんが事業を承継したのを機に、「知恵の経営」報告書の作成に取りかかり、今年2月、京都府「知恵の経営」実践モデル企業の認証を受けた。「初代から最良の顧客とは強いつながりを持っているが、その分、新しい顧客の開拓にはあまり力を入れてこなかった」と

解説

知恵のポイント

家族経営のチームワークを生かし 強みのシェアで市場の幅を広げる

舞台演劇や映画・テレビ衣装は、公演日や撮影日が迫る中で注文があるため、短い納期を提示されることがほとんどだと言います。これに対し、山元染工場では、衣装制作に適した独自の技術とノウハウ、一貫製造を支える蓄積データや設備、そして長いお付き合いの中で構築してきた仕入先や外注先とのネットワークを活用することで、こうした顧客ニーズに応えています。

また、同社は、単に昔ながらの良きデザインを再現するだけでなく、新しいデザインもどんどん生み出しています。例えば、「坊っちゃん」の主人公の衣装と言えば、書生をイメージさせる井縞柄と相場が決まっていますが、そのまま提供するのではなく、そこに明るめの色を挿したり、形をシャープにしたりすることで、私たちにあって違和感のない今風の坊っちゃんが出来上がります。これは一朝一夕に真似できるものではなく、祖父の代からエンタテインメント業界に関わり、顧客のシビアな要求に応え続けることで培われた強みだと言えます。

さらに、新進気鋭のデザイナーでもある桂さんが独自の感性で新たな息吹を吹き込んでおり、地域の祭事やイベント、そして新ブランドの立ち上げなど、ビジネスチャンスは大きく広がっています。家族経営だからこその団結力を発揮し、大切に守り継いできたスキルとノウハウ、そこに既存の枠組みにとらわれない真新しい発想や感覚を掛け合わせることで、山元染工場の可能性は何倍にも膨らんでいます。

応援します! 創業・経営革新・知恵の経営に取り組み企業のご相談にお応えします。 相談無料 TEL: 075-212-6470 (中小企業経営支援センター 知恵産業推進室)

桂子さん。このたび、「知恵の経営」報告書を早速活用して、ホームページを開設した。また、これまで蓄積してきた膨大な型紙を活用したテキスタイルブランド「ケイコロール」を立ち上げた。何百、何千種類もある安土桃山時代の柄の中から、桂さんが「可愛い!」と直感したデザインをチョイス。現在はバッグやアロハシャツ等を手掛けるが、将来的には反物状の染物として販売することを目標としている。

自社内での完全手作業にこだわった、現代ニーズにかなう商品を開発して、新規顧客の開拓を進める。
「当工場の強みが整理でき、ようやく自信を持って自社の仕事を人に語るようになった。これからの取り組みに積極的に生かしていきたい」。家族3人笑顔で語るその姿に、エンタテインメントの世界を裏方で支える誇りが見て取れた。